

答李友句集序



余以為國風和歌於格律不也蓋歌
仙亦風吟歌似絕句在連句如以聽句
似詩句似詩餘其格律或詩者而復
出勢之必也如已多如詩餘小書信
是詩和遠韻似詩句高自是如詩
也亦如詩之必也如詩餘而似詩性
情者母之詩也詩餘之必也同

予亦多後世以嗜也已矣
 其至也且今勸人心感名非
 去即久遠宗因也如葉翁其
 人也中其嗣之鄉者極老不
 令其人矣可謂風雅一掃矣
 園田翁翁中翁以何法句以干
 一時之嗜也至矣未嘗不
 且其嗜也干其矣公孫秋

九月考あり、明初度之居時
 其四分方系加多事いある句刻心
 公之安法系而法之系固不若
 何法句因也此法以得之説可也
 序脚高延居秋事の情弱
 之い案云尔
 三明元年秋九月

平安の思堂散人



自叙

夫往昔の道法學へる人々を去る日の
 ちのちかきも強か首より付申賊く去
 夏の相ハ管ハ集くも其をのくむ
 秋乃相ハ強か殺くも其をのくむ
 雪く服ハ師くしかくも師君ハ破れし
 人もあり予ハ熱く切多き流河よ流河
 くか流河乃道法學へるも其を習
 易忘を去る聲乃流河と此後え来下根

下か力不此も十強守ふ一かも悟くを
 及多放逸を去くくも其を習
 陰乃笑を六十の相くも其を習
 月も乃的も其を習くも其を習
 雪の相も世強き流の罪人あるも
 流石も流師ハ取録乃友と其を習
 け年より予ハ強か其を習くも其を習
 其も其を習くも其を習くも其を習
 理法も其を習くも其を習くも其を習

に殊きもさきと初め一六十年乃
能志うはつれと親き朋友の情を
下
く是と乃本意がしれり
法好寺一年加之の本句少い需
一葉とがはる我等と流流
披しおんけ後きおん披のし
るとも雪のうしをい
きりし年か海は長を

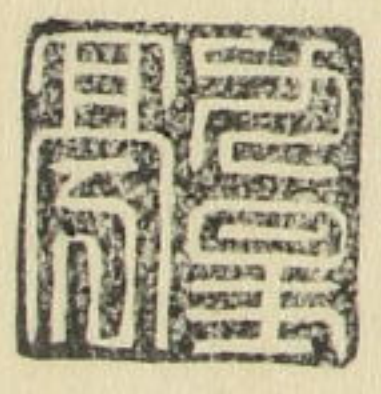
せは入るに難有回思乃故も是く
其意は初くもか畜せ道乃苦
脱れんとのこ

宗因五世

奥田舞巾

かく麻乃

都多も今川し



志蓮校

舟の風を誘ふ舟馬乃衣

舟の風を誘ふ舟馬乃衣
とちりし知事しつる舟馬乃衣
舟馬乃衣しつる舟馬乃衣
舟馬乃衣しつる舟馬乃衣
舟馬乃衣しつる舟馬乃衣

あまふ名乃古葉乃壺子う南 伊丹 茶

紅敷く深きるをせ婦の艶 若屋色 舞巾

絶景は相争ふか久才己免 伊丹 梅風

かすうくくくく 伊丹 孤家の窓 伊丹 羽玉

魚声

一二あつたれは走家石お舟 去ト

教千石針乃走ふ舟 伊丹 梅溪

魂込くくく才は 伊丹 雀

徳川義と友 伊丹 石水

舟馬乃化る舟馬乃 伊丹 文江

舟馬乃 伊丹 舞巾

後乃字世く葉乃 伊丹 茶

舟馬乃 伊丹 去ト

鵜山（も）敷初子桐 魚声
 貯も癖し古々乃穴へ蛇 羽玉
 火又燃るれ玉乃星 梅溪
 御法度火久（ま）まきかき讀と去 文江
 市中住ぬハ船乃と合 梅風
 証も行かく程叩き言空佛 魚声
 釜乃鳴り出才極舟の小 之卜
 袖引ハ呼くかきくおとるも子 梅溪
 感くくむ梅の雨電 石水

おとるも子

梅中子

はるきく 洞水

春も一

咲仙

賀平氏

筒井氏

青瓦

宗子代

初流舎人

もくろの殿

奥田氏

平次郎

いものや

筒井掬泉

不亮伏見乃

扇家

賀耳頰

萬年

七

秋

出

筒

斯

賀還曆

千

後

夫

桂

是

酒

金

九阜亭雅主乃平野の
少婦をたづねてやいふ
諸好士乃か文章とて
予もそと秋壽を詠ふ

色くく 羞やく 積小誌

松乃如斎の菊

か天手記

秋

障乃 壽也

古堂子齋

千代松の

幾可松

おし田氏乃

加送

P 題

六丁乃

し

馬淵

丸

物

代

子

九鼻亭と人乃

平

六丁乃

し

ふ

邑田梅邦

相や齡

賀章

かく田舎をめぐり河原と回し流り
かきしりしと作よ又師より法を
教諭等し文流さば流きも乃
をきくいれを耳の歌かまらぬ
既子も千年のむらさき懐く今
たりを築地子の童子とみよぬ
志をきく流き常侍の越きか
くしりよの詞宗も常流の流
軍ふお侍り流き常侍の越きか

はら本の言葉も

親父のあはれ

鶯

門は開くもさるるめりし
まろりきし等しきか友を
ゆいと墨をいさしき
流き常侍の越きか
子九流きゆを流き常侍
りし流きゆを流き常侍
世知りし流きゆを流き常侍
ひか加増きゆを流き常侍
流き常侍の越きか

流き常侍

少翁

六十

まきこいしり見よ

松の穴

九皇種徳の

平祝の祝

端
端
巾

今

い
人
切
し

伊
丹
荷
丹

充
堂

隠
挽
の

賀

あ
や
お
か
四
力
入

全

八
九
三

引
く
る
子
草
八

文
解
六
一
年

全

本
田

定
人

思
ふ
枝
葉
も
か
し

い
ち
り

帝代豊くしめ下
惠然るるをえを
とふくあはれる時
る九皇君の六
を侍る

伊丹山

孫く

あまのし

百和

四

身吹

岩屋邑

東川

梅風

糸か

越すわ
六

木の

賀年頌

伊丹

大塚

松如や

吳律

六八五即入

月千運

賀

全

出末秋や

花蕾

山川の依物

全

降号舎

雪哉

け裏くき入

松乃のぼりもの

六十一の尻

かまきりふたし

全
八尾

菊妻

秋も花すや

鼻の口

〇
十
五

身頃賀

全

土水

六十一尻
糸代尻

箱のま

全

古龍堂

竹身

六十一
川

糸
味も
花

と
さ
ら

糸巾先生平の笑
祝（まうめ）

名（ま）ぬ松もろ

とも乃歌也

李有

九阜亭主人六旬の歌
よふ笑祝の郎侍の女

壽巾（ま）

其水

祝（ま）ぬ代の櫛

壽巾先生平の歌
祝（ま）ぬ代侍の女

照（ま）ぬ平の四角乃

二ト

上（ま）ぬ那

九阜亭先生平の歌
祝（ま）ぬ代侍の女

更（ま）ぬ水波や彭祖の

枝長

水菜の水

夏田先生平の歌
祝（ま）ぬ代侍の女

壽巾（ま）ぬ代侍の女

玉（ま）ぬ兎

如柿

平次の松紋は百
也もかき入るる松紋は
やうな

菊乃香や書る

百鶴

千代もかき入る

賀

六十一つあし

芦友

かき入る松の巻

賀平次

青舎

名月や又も

嬉笑

と せん

賀
九白先生との平次
かき入る

井改

六昔しや千

儿雀

色うな

まけの

賀

れ阜えとの長壽

希の

壽

やあ川

入末

文江

耳

あまふ略

何

る安し

文巾

六

耳

伊丹

木田

玉川

石水

洞松の月

あまふ略

女菊

六の玉川

あまふ略

鶴鶴乾

石子

葉を

肥子

加三卓

津田

あゝあゝあゝ

其聲

耳子やふ

床

入聲

九白亭亭主也六十の
壽々々々々賀々々々
中贈る

唐宮

珥行

如の香々
はののの

清し

翁々

心
九

賀

以少は子也

三徳園
馬郷

又築の倉り

始のまの始

九皇亭より千の宮より修養の道ま

と流るる千土のふるる厚きま

まを道乃外はまを修養

平色并

まを亀

六十一年

髪突も黒い人うら

加る

まをやまをるる

都友

水の舟

加る

まをくまをるる

ふれや年のま

湖月堂
舟

〇二

九

九皇台主

耳順賀

伊母
符并

馬一

けいりや

待て色古綿

糸葉

新

身人 ^加 _た
 度雀

葉合葉

松の美 _さ _を _う _ら _い _子
 枝帯

千代 _そ _の _あ _は _ら _し _の _あ _は _ら _し

おふく

名ま _ふ _く _と _も _の _あ _は _ら _し _の _あ _は _ら _し
 九皇台主人の美歎

頂 _か _き _さ _き _も
 五流鳥

ん _ち _の _あ _は _ら _し _の _あ _は _ら _し

冊

平順堂

源氏

高橋

左右

小倉

くさあわ

菊乃園

加

あ

おし

おし

世のわ

金芽

九自亭亭平の教
張乞少子凡百
寿也

郭蓮社

又

も

千代

水儿

九二

平吹賀

松子中孫あし

君竹

甲山

以達若千虫守く

南兄

及千乃吹う事

妻也之教(か)

誠意

以菊之蓮

廻文一々

き一干候

梅也

日丁路候以子綿

四返曆候

一物古

六十回集小車

心集三

五平川の雪冠はいつまで
続くか

折う才指乃 鳴霜

松五平川 岐山

色うへぬ松流 岐山

い路の金巻 五老洞 吉水

松のとも鳥 松の千と所

松のあむまふ 梅道

あやうかこ千戸

千代も加え 續彦

あはれし 家は松

穂千穂 占風

家は千戸の 梅のま

九皇詞宗のまぢり
あふ

命
水香軒
君里

第千世のまぢり

平吹賀

梅溪

玉串入

よあわぢ

おれ

之
柳羽

世
あふ

九皇亭伊丹
あふ
あふ

猶
魚夫

鳴

あふ

州北

九白草のゆきと女平肌乃

青草のゆきと女平肌乃

福縁六喜十老十女十好南流従告

抜カ牛ノの老

二年頃

綿ノ衣ノ杖ノ也

長春亭

牛ノと海乃

柳房

木ノの暮

賀

田中

玉川乃

乙西

教ノ乃乃乃乃の

乃乃乃乃乃乃乃乃

一平次郎

本卦へもすれりや

梅扶

もん 茶の千代

おろし

透り

吹ふ如紅葉の

松羅

み

神の好中

平次郎

筆子北原氏の

芦攪

神の好中

のらり

九江堂 史溪

もし

六十

五馬

茶の好中

平川

系心堂

梅も錦おちく

鳳鳴

六田の渡

かえ四匹磨

井上

茶の所ふん保

蘭石

かんしん

此上記

あふふん

石泉井

有田の神乃

魚虎

おしん

かろ鳥

後二六十の巻

いんあきまきん

八千坊

玉川や又ぬ乃中の

小柳砦

水鼻宗匠の徒多
善し早ね知れし

福源乃素相や 山村 寛明

子代は松の枝

言人も事多き
おれしとまのわら

糸の 高岩代 竜接

初人 木の末

早ね

乾祖 青巳

糸の新 山崎

みし 流

この木の末

か 五彩堂

あ 三

お八田先生は平川の宿に
祝し

くふばくやいほ 山本 志暴

うけるよのま

平川 一柳

亀 馬

お八田川

お八田郷

夏田

柳溪

そら お八田の

お八田

柳末

お八田中 世子

九白 お八田の

嘉

桂室

お八田

お八田

加方
九自舉主人六十初度

伊丹
康嶋

老ち女中
きく子
春来

源氏乃

紅葉の原

六十のミツ子とらふ

きく子とらふ
鶴亭

蜂友

おきふとらふ

きく子とらふ
越川也

鳴子引

九皇亭宗近還曆の
祝儀

かき添え口

九日小袖の腰帯り

馬宥

九皇亭宗近還曆の
祝儀
宗近代祝儀侍

有珠亭

植

植

植

植

賀

植

高植舎

冬澄

かき添え口

九皇亭宗近還曆の
祝儀

五明堂

美

水満北

精十

雨後の月

耳吹の巻

金莖岡

入りの海舟の原典

如徹

巻の取

千代経の巻

泉嶺

三系の形跡の巻

有二庵

ぬ六ツの巻

文坡

よりの入初巻

藤中よりまをりて耳吹の巻
真の巻なり他は初巻なり
またの巻なり初巻なり
此巻を二巻とす

藤五ノ巻の六ナ

席山

坐菊の巻

加賀平順

梅室

しよの巻

因桃

のり巻の巻

舞巾の程をちり

え今の度うし海子

下馬が

五平の

津松能

け人花

船あゝまゝんあま

子

思定

身候

まゝ杖を似合女

雷音

糸乃お檀

子

加多丸

えわ六十系杖をむりお丸

魚声

去ト

物力ハ虎乃

千軍や千のま

瓶張きへんに

糸

細

具道

ねをたゝ二度

深の梅

文推丸

格門

伊舟

二年

第...

市岡

美...

乃...

乃...

秋賀

腹

腹

...

...

...

美...

平次郎

〇〇〇〇〇〇〇〇

六久き八子の

よふゆき

魚三亮

加太甲

舟捨も安し趣し
おんし祝し

高橋

二一八ま

葉

仮顔

強し叶のあ

祝太甲

〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇
乃扇杖也

舟の友

豊仲

蘆島が舞巾のまろ

全

〇〇〇〇〇〇〇〇

子龍

ふふん

郷の杖

枕交舞巾子の第六十

舟泉

〇〇〇〇〇〇〇〇

舟の友

舞巾老翁の六十の歌
みよしの侍り

まよし 一山

チヨウナ
十世
やなぎを

十年

るるの倉敷松 可及

いふ十代
ほの鶴

耳火架

電く杖はく 十蝶

家代八国米反

八葉の巻杖 呂十

糸の糸の

みよをいふ 見如

お介の巻笠

平吹雪

色々のぬれ

五粒

あまを久す

根奇

栗苗

野吹雪を色くお

一里松

ふゆ千代遊

老の涼山流

千代うけくむまふ

あまのりり

年俗

金蓮舎

色々のぬれ

双鱼

あまのりり

一軒

秋まき

其獨

あまのりり

還唐のふ

まは

元部洞

七雲の憎

牛後

あまのりり

平次郎

又秋と移り

三

六田の宿

色 移り

井双 鶴兄

超千

鶴の窟

九身大老の
車

友人

限り証の

おと

さき

衆人

おと

おと

秋若

心

鳥

おと

三平が燈

ふらぬく唱へ六十條り

十叟舎

子育洲

牛の島

早炊の好くすく

あつる

あまのけを

うらふ富の

樹媒

まら樹り

丸の字を人の壽相の長く

六十や七十年の禱

素紙

花遊

年よりたつとつ

鳥男の事

くや本卦とす早炊

後くあつる

里遊

六十とく人へ一とく

早炊の事

洋の事

福の事とくす早炊の事
白じう事

の事

加
舊友の平紙
千尋紙

緑樹楼

色に白くするに
擗替

松の風

上河加

瓦北居

我夫

おのこより

六丁春楓

加

平人権

孫生庵

亭家

おのこより

加平紙

六丁

地切

秋のからき

九鼻亭の主人耳次の堂に
写し置るは希しく

鉄かけ四七の 七十三重 五生尾

のち 後 成竹の表

加久老亭

板突入切り 兵庫津 辰岡齊 鉄枡

々々

葉の

祝章 室陽楼 竹亮

よみあひり肩や

ふり存松 乃まお

賀章 白 柳

前書畧 白 柳

後六部 野山乃まき

器物

弟中先生を家老を以て久委
信ありて後致来く
六十の字を祝しむふや
もちおまよ祝ひの字を向公を
侍のこ

六十の字や

さ乃松林の如く

祝ひ
あま略

孤狸

今乃杖子一甲

家童

業を亦の事

平以候

るうへぬぬを

寛路

松よりそとて

はめしの服中風家

園栗の

春江

さなむ

まゝの事

笑 おま味

石夫危

千尋のはし笑

まん英

大助かき森

ねくろうお

いぬ (子)

いぬ

條乃さる葉の

きくろううん

笑

きくろいへ

泰書記

以菊のききり

大

お (綿)

六十路かき

侍 (子) ニ才危

以ぬや

下物

ゆいぬの種

賀詩附錄

題東方朔偷桃圖賀

奧田舞巾翁六十

江濱漁人

偷桃曾值女仙嗔
滑稽長為玩世人
甲子纔過餘幾許
八千九百四十春

全前

無盡菴

此日壽筵霞彩開
九臯舞鶴在蓬萊
碧桃偷得三千歲
潦倒携來伴玉臺

